

# ハンニバル・レクター博士の 探偵能力にみる精神病理

伊 藤 健 太

## 序章 ハンニバル・レクター博士に敬礼：レクター博士の紹介

探偵小説では、もちろん探偵が主人公となるが、その探偵は常人ならぬ特徴がある場合が非常に多い。その端的な特徴は、超人的な記憶力や分析力や直感を有しながら、まるで神経病者の様に生活している点である。言い換えれば、突出した知性を持ちながら、異常とも思えるような言動をとることがある。彼らは天才にして狂人なのである。空想上の人物でありながら、例えばシャーロック・ホームズの様子に世界的知名度を有している探偵達が、そのキャラクターを持つ構造的な意味とは何なのか。天才達に内在する異常性は、それによって彼らを探偵たらしめているのだろうか。そして知性と狂気は相反する作用なのか、もしくは相互に働き合い支え合う存在なのか。以上のような疑問が、これまで、どのように分析され理解されてきたかを調べ考察したい。これが本論文の動機付けであり、目的である。

天才性と狂気を共存させている人物。本論文では、その最たる例として、トマス・ハリス (Harris Thomas) 著の『レッド・ドラゴン』 (*Red Dragon*, 1981年)、『羊たちの沈黙』 (*The Silence of*

*Lambs*, 1988年)、『ハンニバル』(*Hannibal*, 2000年)、『ハンニバル・ライジング』(*Hannibal rising*, 2007年)に登場するハンニバル・レクター博士に焦点を当てたい。天才的な精神医学博士にしてシリアル・サイコキラー(異常連続殺人犯)であるレクター博士。異常な暴力性を持ちながらその知力は計り知れず、性格は冷静で紳士的、室内楽やデカダンスの古典を好む上、相当な美食家でもある。この人物こそが、知性と狂気を高次元で共存させている人物といえることは間違いない。小説史のみならず映画史においても強い印象を残したレクター博士を、本論文の多くの部分で分析していくこととしたい。なお、本文中では、上記のハリスの4つの作品群に加えて、それぞれの映画作品を『ハンニバル』シリーズとして扱うこととする。映画作品とは、『羊たちの沈黙』(1990年 アメリカ)、『ハンニバル』(2001年 アメリカ)、『レッド・ドラゴン』(2002年 アメリカ)、『ハンニバル・ライジング』(2007年 アメリカ)の原作と同名な作品群である。

ここで、本論文の章立てと展開の流れを示したい。本論文は4章構成となっている。序章の残り部分では、『ハンニバル』シリーズおよびレクター博士の紹介を行う。1章では、その他の映画の登場人物との比較から、作品構造におけるレクター博士の位置づけを確認する。2章においては、『レッド・ドラゴン』まで繋がる、推理小説における探偵の系譜と変異について記す。そして、レクター博士の探偵として機能することを示す。3章では、天才性と狂気の対立と共存について分析するために、病跡学の観点から探偵物語を考察する。病跡学の経緯を簡単に紹介した後、小説内の探偵について病跡学的分析を行う。4章は結論部として、精神分析的観点を加えて、レクター博士について総合的な分析と考察を行う。そして最終的に、レクター博士がどのような存在であるかを明らかにしていくこ

ととする。終章では本論文の評価、反省点、課題点を示す。末部に参考文献一覧を記載し、以上が全ての概要となる。

ではまず、作品とレクター博士の紹介にあたり、以下に映画『羊たちの沈黙』のストーリー概要を紹介したい。

FBI アカデミーの訓練生クラリスは、若い女性の皮を剥いで死体を川に流す連続殺人者バッファロー・ビルの捜査に手詰まりを感じた FBI 行動科学課課長クロフォードの密命を帯び、州立の精神病院を訪れる。それは、患者を9人も殺してそこに隔離される食人嗜好の天才精神科医ハンニバル・レクター博士に、バッファロー・ビルの心理を読み解いてもらうためだった。初めはレクターの明晰さに同居する薄気味悪さにたじろいだクラリスも、自分への相手の興味を利用することにした。そこで博士に自分の過去を語り、「羊たちの悲鳴」を聞いていることを伝える。クラリスにとって苦しい回帰の引き換えに、事件捜査の手掛かりを博士から少しずつではあったが、引き出すことに成功するようになる。博士は、犯人は自分がかつて手がけた一患者を想わせる、犯人は2階建ての家を持っている、最初に殺害された女の身辺に手掛かりはないか、などとクラリスに告げる。そんな時、捜査態勢が変貌する。上院議員の愛娘キャサリンが、バッファロー・ビルと思われる者に誘拐された。また、精神病院院長のチルトン博士も、クラリスがレクター博士と接触する理由に気づき、自分の出世欲のために、レクター博士を牢内から出し、彼の陣頭指揮の下に、大々的に捜査を始めることに協力する。やがてレクターはクラリスに最後の手がかりを語った後、隙を見て精神病院職員を襲い、まんまと脱獄に成功、姿をくらましてしまう。一方、クラリスも最初に殺害された女

性の親交関係を洗う間に犯人を確定、犯人の所在を確認したという連絡を受け、自分も現場に急行すると応える。だが、クラリスが赴いた一軒家には、FBIの仲間はいなかった。しかし彼女は勇を鼓して犯人の家に単独で入る。クラリスが奥へと進むうち、家の地下室の古井戸の底深くに閉じ込められた娘を発見。そして犯人が銃を装着する音をさせた瞬間に、クラリスは犯人の位置を確認、犯人を射殺する。数ヶ月後のFBI訓練生の卒業式。バッファロー・ビル事件解決の功労者として栄誉の只中にいるクラリスは、いまだ行方不明のレクター博士から犯行予告の電話を受けるのだった。「羊たちの悲鳴は止んだかね、クラリス？」(ウェブサイト goo-映画-作品紹介より抜粋)

この映画の反響はすさまじく、多くの人々が絶賛した。原作である『羊たちの沈黙』はミステリーの世界にサイコスリラーと呼ばれるジャンルを確立したと評価され、アメリカのみならず日本においても大流行した作品である。ハリスは『ハンニバル』シリーズの他には、一冊しか作品を表していないが、それでも絶大な人気を得た作家となった。また、レクター博士を演じたアンソニー・ホプキンスも高い人気を得た。それまでは演技の実力は評価されながらも、知名度は低かった俳優の一人であったが、映画の成功は彼を一流スターへ押し上げた。その実力を示すように、作品内でのレクター博士の存在感は他の人物を圧倒しており、人々は作品の世界に入ると同時に、レクター博士の住む世界に引き込まれることをすぐに理解する。故に作品の人気はレクター博士に起因しているといっても決して過言ではない。その証拠に2003年に発表された、アメリカ映画協会 AFI (American Film Institute) の映画関係者ら1500人の委員が悪役のベスト50を選定したランキングにおいて、レク

ター博士は1位に君臨した（ウェブサイト 大好きな映画の部屋）。『サイコ』のノーマン・ベイツや『スターウォーズ』シリーズのダース・ベイダーを抑えての1位である。このことから、レクター博士がダークヒーローとしての最高位の人気を博したことが分かる。付け加えれば、ヒロインのクラリスはヒーロー部門の第6位、『羊たちの沈黙』は映画全体の中でも65位につけている。それ程の印象を残したレクター博士の行動とは、どの様なものかを、簡単に年表形式で紹介する。

1939年	リトアニアの貴族ハンニバル家に誕生。幼少から優秀な頭脳を擁する。
1944年	第二次世界大戦により家族が死亡、妹がロシア兵に虐殺され、信仰を失う。日本人である叔母の庇護の下、医学の道に進む。
1957年	元兵士達を探し当て、5人全員を殺害、復讐を完成する。
1960年代	アメリカへ渡り、著名な精神医学博士となるが、その傍ら殺人癖も続く。
1975年	9人目の殺人後、特別捜査官ウイル・グレームに逮捕される。
1980年	グレームから連続殺人犯の分析を獄中で行うように要請されるが、逆に殺人犯へ暗号による指示を出しグレームを襲わせる。
1983年	FBI研修生クラリスから殺人犯の分析を依頼され、正確な指摘をしてみせる。犯人追跡の取引による好待遇な牢獄から逃走、その際4人を殺害。ブラジルのリオに移動。
1990年	フィレンツェで司書として暮らしていたが、過去に半死に追い込んだ大富豪からの復讐を察知し、アメリカへと戻り、返り討ちにしてみせる。

以上が、『ハンニバル』シリーズにおけるレクター博士の主な行動である。作品別に分類すれば、1957年までが『ハンニバル・ラ

イジング』の内容、1980年までが『レッド・ドラゴン』、1983年の出来事が『羊たちの沈黙』に収められ、1990年が『ハンニバル』で描かれた。但し、『ハンニバル』の小説と映画では著しく結末が異なっているため、一致している部分までを記した。見て分かるように、レクター博士は十数人の殺人を行っている。さらに、殺した相手を調理して食するという異常な嗜好を持っている。そのため、作中では「カニバル・ハンニバル」（人食いハンニバル）と呼ばれることがある。狂気の塊のようなこのレクター博士の行動と作品の分析は4章で詳しく行う。1章ではまず、レクター博士は異常連続殺人犯であり、暴力への躊躇を微塵も見せない稀代の悪役として登場したこと。そのことから、その暴力性が人気の要因となったのかどうかを考察したい。そのために、『ハンニバル』シリーズ以外の、殺人犯としての悪役との比較を行うことにする。

## 1章 カニバル・ハンニバルをプロフィールする：暴力性と知性の比較

ここからは、『羊たちの沈黙』と同じく、アメリカで製作された映画に登場する悪役を中心に見ていくことにするが、ここで表面化の問題がある。それはアメリカの国民性に狂気を求める病的なものをみることができるのである。連続殺人を描いた映画『コピーキャット』（1995年 アメリカ）では、殺人犯が「リンカーンの本よりも切り裂きジャックの方が売れている。俺もすぐに有名人になるだろう」（109分30秒）と語る。事実欧米では、英国で有名となった切り裂きジャックの事件を例とするように、連続殺人犯に対して二つ名がマスコミによって付けられ、非常に有名になることがある。すなわち民衆は、メディアから得る殺人犯の情報を娯楽としているの

である。その現象を内田樹は『『抑圧されたものの回帰』(revenant = 回帰するもの、不気味なもの) についてのアメリカ的な決着』(内田 p156) と推測した。つまり、社会的に認められず無意識下に抑圧された人々の欲望が、「代理表象を経由して物語として徴候化」(内田) したのである。そうして近年のアメリカは、マスメディアの主先導により有名な殺人犯を実に多く輩出した。「ミルウォーキーの食人鬼」ことジェフリー・ダーマー、「サムの子」ことデビット・パーコヴィッツ、「ボストン絞殺魔」ことアルバート・デサルボなどが代表される。この様な連続殺人犯をモデルとして、猟奇殺人を題材とした映画が次第に作られ始める。

『セブン』(1996年 アメリカ) では、キリスト教における七つの大罪になぞらえた殺人を起こし、最後は自らの死で事件を完成させる犯人が登場する。この犯人は、極めて冷酷でありながらストイックである。だが、この犯人が強い信仰心のために殺人機械と化しているのに対して、レクター博士は信仰心を幼い段階で捨てている。さらに、殺人以外の行動を一切していない点は、知識人としての趣味を持つレクター博士と大きく異なる。

『ゾディアック』(2007年 アメリカ) では警察の捜査をかいくぐりながら、新聞社などに自ら手紙を送りつけた実在した快樂殺人者を描いている。迷宮入りしたこの事件の犯人はかなりの知能犯だと考えられる。しかし、あまりにも自己顕示欲が強い点は、マスメディアに支配されている一般大衆から犯人を脱却させてはいない。

前述の『コピーキャット』の殺人犯もまた、警察を翻弄することができる知能犯であることは明確であるが、あくまで模倣犯として犯行に及んでいるため、レクター博士以上の印象は必然的に受けない。レクター博士の犯行はときに芸術作品か何かの儀式のようであり、その想像力がまた我々を恐怖させていると言える。

以上のように、他作品に登場する殺人犯を紹介したが、レクター博士と比較した場合では犯罪者としての格差すら感じられる。どの犯人もレクター博士以上に、俗世からの乖離や行動に対する絶対的な自信を表すことができていない。つまり、レクター博士の象徴的意味とは、大量生産された殺人犯としての悪役に留まらないと考えられる。それでは、ハリウッド・ホラーの不滅な怪物達の一人として考えることはできないだろうか。

レクター博士が単なる殺人犯でないとするならば、人を殺し食すという凶暴性から、異様な怪物として見ることもできるのかもしれない。その論拠は、レクター博士が世に初めて登場した小説『レッド・ドラゴン』では主人公グレアムがレクター博士をこう評すからである。「あいつは怪物さ。ときどき病院で生まれるあの憐れむべき、人間ともいえないものの一人だよ。(中略)レクターは頭の中はそういうやつと同じなんだが、外見は普通だから誰にもわからないんだ」(『レッド・ドラゴン』p100)

ここでいう怪物とは、獣のようなものではなく、悪魔的な存在を指す。この様な怪物が生み出される経緯は、およそどんな宗教にも存在する悪魔崇拜、言い換えれば異端の存在への畏怖に見出されるのではないか。例えば、西洋のドラキュラなどは、当時の東欧からの移民を畏れていた英国人が生み出した怪物であると言える。畏れはしばしば神格化へとすり替わることがある。それは、民衆が自分たちより強く恐ろしいものを恐怖するあまりに、畏れる対象を人外の者として見なす、ということである。そして強靱な力、不死な肉体、変身能力などが対象に賦与され怪物が生まれる。つまり、アメリカで生まれた『13日の金曜日』のジェイソン、『エルム街の悪夢』のフレディなどに代表される怪物も、連続殺人犯への民衆の関心から想像されたものであると言えよう。そして、その怪物達の要素が



一部ではあるがレクター博士にも受け継がれたのである。例えば、レクター博士を護送する際に付けられる顔面の拘束具は、ホッケーマスクを付けるジェイソンを明らかに連想させる。また『ハンニバル』で刑事を殺害する際に使用するナイフのイメージは、フレディの爪と重なってしまう。しかし、これらの怪物達とレクター博士では決定的に異なる点が存在する。それが、天才的な分析能力と知性、そして優雅な趣向性である。例えば、レクター博士は室内楽を好み、ハーブシコードを自ら奏でることもある（『ハンニバル』Ch9、34分11秒）。文学では19世紀末の文学を好み、ウィリアム・ブレイクの詩を引用し（『レッド・ドラゴン』Ch8、45分43秒）、クラリスへの手紙に非常に珍しい香水を使うこともあった（『ハンニバル』Ch11、54分55秒）。芸術や文学に深い造詣を持ち、食事や服装に非常に気を使う面から考えると、レクター博士は殺人犯としては異質である。だが、これらの特徴は1章で取り上げる探偵小説の主人公が必ず持っているものなのである。故に、レクター博士は単なる悪役としての存在以上の、安楽椅子探偵としての役目を有している、という次章の結論が、レクター博士の人気に隠された真実であるのではないか。

本章では、『ハンニバル』シリーズから誕生した絶大な人気を誇るレクター博士を紹介し、その悪役としての魅力の考察を試みるために、その他の映画の悪役と比較を行った。レクター博士は悪役が持つべき暴力性を保持しているが、その他の悪役にはない知力や趣向性から、単なる怪物とは考えられないことが明らかとなった。次章では、レクター博士の存在意義が推理小説の安楽椅子探偵役としてあることを主張したい。

## 2章 安楽椅子の一族：探偵小説の定型と歴史

前章では、レクター博士は数いる「悪役」の中でも、非常に高い人気を有していることを紹介した。そしてその要因とは、レクター博士が殺人犯としての残虐性に加えて、天才的な知性と高貴な趣向性を有しているためであるとした。次に本章では、これらの特徴を考察するために、レクター博士の物語上の存在意義について述べていくことにする。結論から述べると、レクター博士は、いわゆる安楽椅子探偵の立場から事件を分析し推理する役割を担っている。この安楽椅子探偵とは、調査を行わず、集めた情報のみから事件の真相を暴く、という特徴をもつ探偵の総称である。つまり、推理小説中の世界では最も優れた人物が居るべき地位にいるのである。本章の目的はなぜ、そのようなことが言えるのかを明らかにすることである。それは、『ハンニバル』シリーズが推理小説、探偵物語として解釈することが可能で、レクター博士はその世界では探偵の役目を果たしていると言えるからである。加えて、探偵役として分類するならば、安楽椅子探偵とすることが最も的確であるためである。表層的には殺人鬼という悪役として存在するレクター博士に、全く別なイメージを与えるためにはどうしなければならないのか。レクター博士がその様な探偵役であるという根拠を示すためには、過去の安楽椅子探偵小説を紹介し、レクター博士との共通項を検出することで可能になると考える。この点を確認するために、本章では探偵物語の系譜をなぞりながら、その結論に至りたい。

ここからは、19世紀の探偵小説の始まりから、19世紀末の探偵達、そして20世紀に登場した探偵、というように古い年代の登場人物から順に見ていくことにする。一般的に、探偵物語の元祖とし

て知られている作品は、アメリカ人エドガー・A・ポーの『モルグ街の殺人』、『盗まれた手紙』、『マリー・ロジェの謎』の1845年に発表された三部作で、その中に登場するオーギュスト・デュパンが世界最初の名探偵とされている。しかし、犯罪を扱った小説自体はポーが発案したわけではなく、19世紀前半には実際に起きた事件を紹介した犯罪録がイギリスやフランスで広く読まれていたことが、推理小説の原点とも言える。『探偵小説の多元文化社会』で溝口薫は、それらの中でも、元犯罪者でありながらフランス警察の密偵部で活躍したフランソワ・ヴィドックが著した『回想録』は後世の探偵小説に強い影響を残したとしている。

「ヴィドックは、その強烈な個性、捜査能力ゆえに人々の記憶に鮮烈な探偵像を刻みつけた……後年の探偵が個人としてさまざまな魅力をもった英雄になる可能性を切り開いたといえるのである」（溝口 p16）

とあるが、その後はヴィドックの様な警察の密偵、つまり公的な探偵が活躍する物語はあまり発表されない。それは、「当時の警察は清廉潔白のイメージがもたれにくい存在」（溝口 p17）だったため、一般の人々から敬意を払われていなかったことに起因している。だが、粗悪な犯罪者の存在を人々が意識し始め、彼らを捕まえる人物を求めたことは確かであった。そしてイギリスにおいても

「批判もあったが、1842年、フランスに遅れること30年にして首都警察にもようやく犯罪捜査専門の刑事部ができる。そして名実ともに探偵小説の始まりを生む母体となる。というのはこの刑事部の設立によって英語はようやく“detective”と

いう形容詞・名詞を得るのである」(溝口 p20)

この様な、人々の犯罪への興味関心や警察の事情を反映しつつ、ヴィドックの著書に影響を受けたアメリカの作家ポーはデュパンという探偵を生み出した。だが、ポーは捜査専門の刑事ではなく、風変わりな素人を主人公に置いた。このことが「小規模、素朴なもので、刑事はもっぱら真面目で、物語は単調、現実的」(溝口 p23)であったそれまでの犯罪小説を、知的娯楽作品へと作り替えたと言える。なぜなら、警察が解決しきれない大胆で不可解な事件を、超人的な推理力を持つ一人の紳士が鮮やかに解明する、そのプロットは当時の人々には非常にエンターテイメントとして感じ受け入れられたと考えられる。このポーの三部作の成功は、実に多くのオマージュ作品を生み、後に続く推理小説家に多大な影響を与えることになった。その影響とは、具体的に言えば、「19世紀末には、ポーが提案した古典的探偵小説の原則が彼の後を受け継いだ作家によって文学の一つの「フォーミュラ」(formula=公式、方式 筆者注)に熟成していった」(溝口 p89) ことである。

ここでいう「フォーミュラ」を説明するにあたり、別府恵子は推理小説史研究家のジョン・カウエルティから引用して、以下のように定義した。

「ポーは推理小説に必要な4つの相——事態、行動パターン、登場人物とその相関関係、物語の背景——について規定を設けている。物語はまず未解決の事件で幕が開かなくてはならない。そして、行動パターンは6つの局面にわたる捜査と事件の解決を中心に展開される。つまり、探偵に関する前置き、事件と事件を解決する糸口、捜査過程、事件が解決したことの告示、ど

う解決したかという説明、それから、終局が中心に構成される。これら6つの局面はいつも順序通りである必要はなく、順序の入れ替えがあってよい。解決方法を説明するには、新しい角度から洞察することが必要であり、読者にその新しい見方を理解させることが肝心なのである。ポーの描いた探偵は、かくたる探求者で、貴族的か奇怪かのどちらかであり、世俗的な危険にさらされるようなことはない」(別府 pp118-119)

この様な定型を、推理小説がジャンルとして枝分かれしていくことになりながらも、多くの作家が踏襲していくこととなる。つまり、上記の様なプロットを持つ小説は推理小説と定義して差し支えないはずである。その中で、謎の解明を行い、崩壊した秩序の回復を任されているのが探偵役の人物なのである。そのため彼らには一様に、真理を見逃さない探求者としての高い能力が天与された。そして、デュパンを意識しながら彼を超えようと試みる様々な探偵が登場することになるのである。

まずは、おそらく名探偵としては世界一の知名度と人気を誇るシャーロック・ホームズの紹介をしたい。世紀末のイギリスの作家コナン・ドイルは、「紳士階級から中下層階級の文字の読める読者層まで広い階層が楽しめる物語への需要が高まっていたため」(溝口 p44)に、正義感に満ちたヒーローとしてホームズを誕生させ、爆発的な民衆の支持を得た。ドイルはホームズ物語を、ポーが三部作の中で見出した細かな探偵物語の定型、例えば、主人公は私立探偵であること、相棒役である人物が語り手を務めること、などの形を継いだ設定にした。さらにドイルは「デュパンの物語以上の楽しみを提供するという約束」(溝口 p44)をホームズ最初の事件で行った。その方法も、やはりポーのデュパンに倣ったものであった。デュパン

は、先述した探偵のモデルであるヴィドックを「推量がうまくて忍耐強かったが、学理的な知識がない」（「モルグ街の殺人」p24）と評し、自らの思考方法の効果を示した。

一方、ホームズも「デュパンは取るに足らないくだらない男さ。タイミングをみて友達に話しかけ、思考を乱すなんてやり方は派手なだけで中身がない」（『緋色の研究』p4）と語り、当時では珍しかった指紋による調査などの最新技術を駆使する。そしてドイルは、ホームズに独自の推理理論と精力的な活動によって難事件を解決させていく傍らで、ホームズ自身の魅力的な人柄を語らせている。自信と正義感に溢れ、芸術とバイオリンに精通し、体力にも優れていて時に荒事をこなすが、生活ぶりはひどくだらしがなく、地動説を知らなかったことに対して、「そんなことを知っていて何になるのだ」（『緋色の研究』p5）と言い、ワトソンを呆れさせる。この名探偵は圧倒的な人気を得て、ホームズが死亡したと書かれる『恐怖の谷』が発表された際に、実際に葬儀を行う程の熱烈な信者を生んだ。つまり、ドイルは探偵の魅力として、新たに人格的な魅力をホームズに加えて、より大衆文学として探偵物語を広く楽しめるよう進化させることに成功したのである。

ホームズと時代を同じく 19 世紀末に、デュパンよりさらに陰鬱で風変わりな人物が登場した。M・P・シールの作品『S・S』などに登場するプリンス・ザレスキーは、世紀末独特の頹廢的な雰囲気をも具現化したような人物と言える。彼に外界からもたらされる物としては、新聞と物語の語り手であるシール自身が持ち込む情報だけである。つまり、ザレスキーはデュパンが『マリー・ロジェの謎』で行ったような、調査を一切行わず情報からの推理のみで結論を導き出す、といった方法を完全に受け継いでいるのである。この物語の構成は、安楽椅子探偵の典型的な例と考えられており、ザレスキー

はその第一号として登場したのである。彼の特徴は、推理に臨む「想像できないほどの熱心さ」(『S・S』 p159) を見せた次のような発言からよく分かるのではないだろうか。

「君は極めて群衆と同じ判断をするんだな。非合法的な殺人はいつも一つの過ちではあるが、かならずしも犯罪ではないよ。たった一人殺しても本当に悪魔的だとすれば、一人殺すほうが多勢を殺すよりも質的に悪魔的の程度が軽いとはいえないじゃないか？ 反対に、ブルータスが一千人のシーザーを斬り殺したとしても、ひとつひとつの行動が世にも崇高な自己抑制の現れだとしたら、彼は天国で聖者の列に加えられてもいいかもしれない」(『S・S』 p162)

この様な達観的と言える人物を創造した作者のシールも、ザレスキーをデュパンの正当的な後継者として誕生させたことを認めており、暗闇や孤独を好む生活ぶりや陰鬱な性格などはデュパン以上であるように感じる。だが、古代史や古代文明に対する該博な知識や、帰納法を用いる鋭い推理力は、安楽椅子探偵の祖としての実力を十分に有していると言える。

20世紀に入ると、1905年に隅の老人と呼ばれる名前も素性も分からない謎の名探偵が登場した。パロネス・オルツィが発表した短編集『隅の老人』に登場するこの老人は、いつもロンドンにある喫茶店の隅の席にいるために、一般的に隅の老人とされている。外見は痩せ細り、髪の毛も薄く血の気もないが、性格は傲岸不遜と言える。女性新聞記者に難事件への自らの推理を聞かせる態度は、あくまで自信に溢れている。「どんな犯罪だって、調査の結果入るべき情報さえ入っていれば、謎なんてものはありはしない」(『フェンチャー

チ街の謎」p4) と語るように、自らの推理に絶対の自信を持っている。だが、この隅の老人も、デュパンやザレスキーと同じように、ただの素人である。「何も警察を助けてやることはないじゃないか。わしはただのアマチュアさ。警察が、どうしても解決不可能だと、音を上げたくなるような事件が起きると、つい手を出してみたくなる性分だね」(「ダブリン事件」p187) と、事件を解決する動機は興味本位であることを説明している。そのためか、事件の解明さえ成し遂げれば、「警察のお偉ら方の中に、この犯人と同じくらい頭脳のはたらきをする人物がいたら、まず大半は解決してしまうだろうな」(「ダブリン事件」p187)、「もしわたしが裁判官で、あの殺人を考え出した男に死刑の判決を求められても拒否するね。あの事件は何もかもが実に芸術的だった」(「バーシ街の殺人」p237) などと、その謎を作り上げた犯人に同情し、敬意を示すこともある。それはつまり、探偵は秩序の回復を行うが、社会正義の実現に全て直結しているわけではない、という一例を示しているのではないか。後述の点になるが、事実、この老人は犯罪者としての裏の顔を持っていることが示唆されている。

ここまで様々な探偵を紹介したが、本章における議論として注目したい点は、探偵達は座ったまま推理するという推理方法が非常に有名になったという点である。デュパンは、『盗まれた手紙』で警視総監の捜査内容を聞き、その問題点を指摘する間は、肘掛け椅子に終始座っている。ホームズは、窓の外に見える人物が元海兵隊であることや、ワトソンの持つ時計から彼の家族の性格までを、肘掛け椅子に腰掛けたままほぼ完璧に説明し、自分の分析力を披露してみせる。ザレスキーも、ロンドン郊外の邸宅から一步も出ることなく、阿片をくゆらし、長椅子に横になったままいくつかの新聞記事を手がかりに難事件を説いていくという設定から分かるように、安



楽椅子探偵の歴史を語るには確実に必要な人物である。隅の老人も、いくつかの事件に限り、法廷で容疑者の顔を見たときの直感や、新聞から得られる情報だけを頼りに推理するため、安楽椅子探偵の代表的存在とされている。こうした安楽椅子探偵の広義は、「探偵役が一步も出歩かない。事件のデータは誰かしらの手を通して持ち込まれ、探偵役は純粋に机上の推理だけで謎を解決する」（小林 p287）とされている。つまり、捜査や立証が完璧に行われていれば、探偵の役目は椅子に座ったまま分析的知性を働かすことのみで良いはずである。つまり、警察やマスコミなどによる探偵以外が行った捜査結果から、帰納法的推理をするだけで探偵の役目は終えている、と言えるのではないか。そしてそれが可能なのは、驚異的な記憶力や観察力、鋭い直感、該博な知識などを利用し、天才的な分析能力を発揮する探偵達なのである。このことから、これらの物語には純粋な謎を純粋な推理で解き明かすという、推理小説の原点を見ることが出来る。そのため、この推理法は、古くから読者の人気を集めており、安楽椅子探偵物語と呼ばれる推理小説のジャンルを決定づけるまでに発展した。

それでは、その後の安楽椅子探偵の系譜とはどのように続いていくのだろうか。第一次世界大戦を終えて、1920年代は推理小説の黄金期と呼ばれている。この頃はアガサ・クリスティ、エラリー・クイーン、ヴァン・ダインなどが活躍した時代であり、現在でも愛読される多くの名作が生まれた。その中でも、クリスティが創造した二人の探偵役のポアロとマーブルは、安楽椅子探偵と数えることができ、また日本での人気も非常に高い。ポアロとは私立探偵エルキュール・ポアロのことで、退職した元ベルギー警官である。外見は小男で小太り、口ひげと服装に異様に気を配っている。また、うぬぼれに近い高い自意識を持つが、事件の毎にフランス人に間違え

られるエピソードが挿入される。この特徴はポアロを他の探偵よりユーモアに感じられる。その冗談さに反して、事件の謎に対しては「小さな灰色の脳細胞」と自負する彼の頭脳を頼りに解明する。事件現場に赴くことよりも、順序と方式を脳内で組み立て、犯罪者の心理を読み切るといった推理法を好む。その例として『オリエンタル急行殺人事件』では、容疑者全員から話を聞くことだけで、真相を見抜いた。彼自身、安楽椅子探偵の分析的才能を得意分野と考えていたのである。クリスティが考案したもう一人の安楽椅子探偵はミス・マーブルという老婦人である。先に述べた、調査を探偵役が行わない、という安楽椅子探偵物語の特徴からすれば、マーブルが登場する短編シリーズではより顕著である。このマーブルは文字通りの「安楽椅子」に座り、知り合いの警視総監から持ちかけられる事件について淡々と推理し真実を言い当てている。老婦人という設定から、立ち上がることも少なく、安楽椅子探偵の代名詞的存在と言える。

さらに、安楽椅子探偵を列挙していけば、1952年に発表されたジェームズ・ヤッフェの短編集『ママは何でも知っている』において、殺人事件を解決に導くのは刑事ディビットの母親である。刑事の息子が直面している未解決事件を、情報を悉に語らせることで、夕食の間中に解決してしまうという特異な安楽椅子探偵役である。ニューヨークのブロンクスに住んでいることからミステリーファンには「ブロンクスのママ」として有名になった。探偵としての特徴は、特別な知識や教養を得てはおらず、「平凡な常識、人間の心理を見抜く天与の才、何ものにも決して欺かれない才能」（「ママは何でも知っている」p12）を持っているだけのごく普通の市民であるということである。クイーンが評した「人間性の理解と愛情からくる直感」をもった「古典的な解決方法」（ウェブサイト「探偵の

口笛——海外ミステリのクラシック音楽」)をとる探偵の中でも最も庶民的な探偵と言えるだろう。

安楽椅子探偵物語と歴史ミステリーを結合させた傑作として1951年の『時の娘』がある。ロンドン警視庁グラント警部が、悪虐非道の王として名高いリチャード三世が甥たちを殺害したとされる事件を、純粹に文献だけで推理する。入院中の暇潰しとして行っていたが、やがて調査役の青年と共に一般的な史実とは全く異なる結論に至るまでの物語である。ホームズ物語では活躍をできないロンドン警視庁であるが、この作品ではその中の警部であるグラントは、鋭敏な感覚を失っていない。その卓越した千里眼的推理を、江戸川乱歩は学術的な考察である、と評したと小林は説明した。

「あらゆる学問を研究する興味は、ことに未知の分野を手に入る限りのデータによって解明していく面白さは、小説上の探偵の推理の面白さと酷似している。『時の娘』は純粹の学問とも相わたる小説である。これは「安楽椅子探偵」としても斬新である」(小林 pp286-287)

乱歩が述べるように、安楽椅子探偵とは、公的なあるいは私立探偵が難事件を解決する物語としてだけでなく、個人の趣味や学識の結果から導き出される推理も、安楽椅子探偵物語の一つであることが示すことができるだろう。

ここまで本章では、探偵小説の成り立ちと安楽椅子探偵物語の系譜について紹介した。ここで、本論文の議論対象であるレクター博士に焦点を戻したい。そこで、『ハンニバル』シリーズが、探偵物語としてみなすことが可能かどうか考察することにする。まずは、前章の中で記述した『羊たちの沈黙』の内容と、本章で記述した推

推理小説の「フォーミュラ」の概要を比較する。するとほぼ疑いもなく一致していることが確認できる。つまり、連続女性殺人事件という未解決事件で幕を開け、レクター博士やクラリスなどの登場人物が語られる。FBIによる捜査が行われ、犯人の目的や存在が明らかになり、事件は解決に向かう。このような『羊たちの沈黙』のストーリーの展開は推理小説の定型なのである。しかし、この物語には混乱が生じている。本来、クラリスは探偵役となり機能しなければならないが、彼女が活躍する局面は調査の際と、犯人と対峙する際のみである。主役として登場しながら、分析と推理には必ずレクター博士の助言を必要としている点は、彼女の物語中の機能に支障を来していると言えないだろうか。二人の構造上の関係を構築し直さなければ、レクター博士の存在意義を理解したとは言えないとも考えられる。そこで、その再構築を、小説批評家の野崎六助の分析を引用し説明したい。

「レクターはガイドでありアドバイザーである位置で登場している。この位置はある意味では物語にとって超越的だ。神の視点に近いものを許されている。(中略) 物語の混乱を解決するには、作品を伝統的なフーダニット・ミステリーの定型にあてはめてしまうことだった。この中でレクターは「名探偵」の役なのだ。クラリスとレクターの関係構図は、さしずめレストレイド警部とかれを憐れむホームズといったところだ。かれは自在に助言する。事件の輪郭を分析し、予言すらも愉しむ。この思わせぶりの言質に捜査官がふりまわされる様は、古典探偵小説に親しい風景でもあった」(野崎 1997、p132)

つまり、その混乱から生じるレクター博士の象徴的意味での存在

とは、前章で比較した怪物役としてはあり得ない。本章で照らし合わせられるような安楽椅子探偵と定義することが最も適切であると考えられる。なぜなら、レクター博士はFBIが捜査し収集した犯人の情報を、即座に天才的な知能で分析し犯人像を掴んでしまう。このような情報のみからの推理方は、本章で紹介した探偵の行為そのものだからである。再び野崎から引用すると、「古典探偵小説には決まって、有能だが切れ味に欠ける警察官の指導役として、素人の天才名探偵が配置されているものだ。天才が不可侵であるように、誰もレクターの役割を覆すことができない」（野崎 1997、p133）として、安楽椅子探偵としてのレクター博士を、現代的な「捜査アドバイザー」（野崎 1997、p133）と表現している。もっとも、レクター博士の場合は、事件の以前から犯人となる人物を間接的に知り得ていたことが示唆される。『レッド・ドラゴン』では、連続殺人鬼としてのレクター博士を敬愛する犯人からファンレターと呼べるような手紙が届けられる。『羊たちの沈黙』では、精神病理学者時代に治療を試みた患者の知り合いが犯人という設定である。このため、調査と分析以外の方法で情報を取得していたことになる。さらに、自ら解明することもなく、クラリスに助言という形で断片的に情報を与えている。そのため、果たしてどの段階で結論に至ったのか、もしくは本当に全ての真実を得ていたのか、定かではない。しかし、古典的小説に多く見られるような孤島や屋敷内などの限定された空間ではなく、アメリカ中の人間が容疑者と言えるような事件であるので、純粹な推理でない部分があったとしても、レクター博士が探偵役として機能していると十分に考えられるのではないか。

また、デュパンやザレスキーの物語が安楽椅子探偵の始まりだとするならば、『ハンニバル』シリーズまでに一世紀以上が経過している。現代版の安楽椅子探偵としてのレクター博士は、どの様な点

が過去の探偵達から変化したのだろうか。まず、情報の取得方法として、『ハンニバル』ではレクター博士はインターネットを利用している。だが、この点は重要な点ではなく、推理に活用される情報でもなかった。『レッド・ドラゴン』『羊たちの沈黙』では、やはり過去の探偵と同様に、新聞や警察の調査報告を利用している。独特な点としては、レクター博士は嗅覚を有効な武器としている。匂いを細かく嗅ぎ分け、自分にしか分からないと思いきこんでいる相手に正確に指摘をしてみせ、会話のイニシアチブを取ることはレクター博士の常套手段である。クラリスとの特殊ガラス越しの会話において「エビアンのクリームを使っているな。香水は“ルール・デュ・タン”だ。だが今日は使っていないな」（映画『羊たちの沈黙』Ch 4、14分35-39秒）と言い当てることも難しいことではないようである。そして、決定的に時代の変化を感じさせる特徴は、プロファイリングを推理方法として用いたことである。これは、発生した犯罪の特徴から行動科学的分析を行い、犯人の性別、職業、年齢などの特徴をある程度推測し、捜査に活用する方法である。行動科学とは過去の犯罪データを解析し信憑性のある情報を得ることが目的とされる。科学の進歩と共に犯罪捜査においても最新科学が取り入れられてきたが、プロファイリングは当時のFBIの最新捜査方法として注目を集めていた。例えば、レクター博士が、被害者の口内に蛾が詰め込まれていることを聞き、蛾の蛹が成虫に成長するように犯人も変身願望を抱いていることを推理し、性転換手術を行える場所に手がかりがあることを示す（『羊たちの沈黙』Ch13、55分12秒-56分33秒）、このような操作方法がプロファイリングの一例である。レクター博士は精神科医としての立場から、このプロファイリングをより犯人の精神面を分析することに活用し、犯人像を容易に導き出すことができるのである。あとは、この犯人像からFBIの

捜査官が犯人の居場所を探し当てるだけで、事件は解決となる。つまり、探偵物語の主人公が当時の最新の捜査方法を用いて調査を行うことがある様に、レクター博士にも FBI の最新鋭の能力が備わっているのである。

本章では、レクター博士の存在意義を示すために、探偵物語の典型的なプロットや探偵の特徴を紹介し、それらとレクター博士の物語を比較した。本章の結論として、レクター博士が安楽椅子探偵として物語中に存在している、という仮説は、過去の安楽椅子探偵物語との照合により明らかにできたと考える。次の2章では、探偵役となる人物には、レクター博士以外でも、ザレスキーの様な病的な人物が多い点について、病跡学的観点から考察する。

### 3章 脳内の迷路：探偵達のパトグラフィー

前章では、レクター博士の物語中での役割は、推理小説における探偵役として独房から外へ出ることなく犯人像を分析した、安楽椅子探偵であることを示した。つまり、レクター博士は知性のある怪物と捉えるべきではなく、狂気を持つ探偵と考えるべきである。ではなぜ、驚異的な分析的知性を持ちながら、凶行を続けたのか。その知性により自らを止めることはできなかったのだろうか。また、レクター博士でなくとも、前章で取り上げたような探偵役となる人物の性格や行動に異常性を見つけることは容易である。一人の人物に、天才性と異常性が共存しており、さらにその人物が探偵役として物語を支配していることに、どの様な意義があるのだろうか。この問題について論ずるために、天才的人物と狂気の関わりについて考察することが本章の目的である。そのために、天才の精神性の研究が主な課題である病跡学という学術的分析方法を用いて、探偵物

語を考察したい。章の構成として、始めに病跡学の歴史を紹介し、その後、探偵物語を分析する。

それではここから、本章でのアプローチの方法となる病跡学について概説したい。病跡学は、ある個人を精神的な疾病、つまり精神病理学観点から研究分析し、その生涯の活動における疾病の意義を明らかにしようとする学問として誕生した。現在では、精神分析的観点も取り入れられ、多方向からの研究が為されている。英語ではパトグラフィー (pathography) といい、病気の (patho) 記録 (graphy) が本来の狭義であり、医学的研究の度合いが強かった。ある個人の生活や作品を取り扱うが、伝記 (biography) や書誌学 (bibliography) とは区別される。そして、研究される人物は才人であることが多く、殊に文学、音楽、政治、芸術の分野での天才が対象となる。それは、彼らの中には精神異常や疾病を抱えていたと考えられる者は少なくないためである。加えて、その精神病理と深い創造性との関連を研究することが病跡学の目的と言えるのである。また、ここでいう天才とは精神的に傑出している人物で創造力的頭脳が優れている、という意味合いで使用している。つまり、肉体的に優れているスポーツ選手や、創造性を伴わない表現者としての歌手や演奏者も天才と表現されることは非常に多いが、この学問の対象にはなっていない。

病跡学の歴史は、天才と狂気の関連性という観点から考えれば、古代ギリシア時代に遡ることが出来る。福島章によると、ギリシアの「プラトンは、狂気は神の賜物、すなわち超自然的な力が人間の生の中に侵入してきたものであり、詩的直感も理性の統制と批判を受けなければならない」(福島 1984、p211) と考えていて、その弟子の「アリストテレスは狂気の発生は優れた頭脳には欠かせない」(福島 1984、p211) と記した。その後、この研究が隆盛を極める



のは、ルネサンスを経て19世紀中葉から20世紀初頭までの期間である。天才の病理と創造性について近代医学的観点から研究しようとする試みは、当時流行のテーマであったようで、ショーペンハウエルやド・トゥールなども研究を著していた。その中でも、イタリア人博物学者のチューザレ・ロンブローゾが、世紀末から20世紀初頭にかけて天才に関する論文を続けて発表したことが、病跡学の創始となったとされている。このロンブローゾは、犯罪者の一部は生まれながらに身体的や精神的な特徴が見られるといった「生来犯罪者説」を1867年に発表し、大きな反響を呼んだ学者であるが、その30年後に発表された天才論も多くの知識人の思想に影響を与えた。その内容は福島によれば、「ロンブローゾの天才論は、天才の症状や病気を列挙し、天才を変質者や半狂人と定義する古典的な方法であった。しかし同時に、天才の形成にかかわる環境、風土、遺伝、精神障害などを多角的、多次元的に考察しており、病跡学の原点にふさわしい重厚さ」（福島 2000、p15）であった。ロンブローゾが定めた、天才を変質者とみなす証拠として、彼らには特有の徴候が見られるのだという。天才でありながら狂人である人物の特徴とされる点を要約して列挙すると、「自負心（虚栄）、薬物乱用、性の異常、独創性、宗教上の懐疑、自意識（告白癖、自画自賛）、はげしい二面性（躁と鬱、神と悪魔）」（福島 1984、p215）などである。この様な病的徴候を見出していく方法は、生来犯罪者説の延長線上にあるもので、天才への理解や尊敬を読者に与えるものではなかった。だが、これらの特徴が世紀末の探偵物語の主人公達に反映されたことは明らかであり、この点は後述で分析する。

その後、ドイツ人精神科医メビウスが論文の中で“pathography”という言葉を用いたことで、病跡学が提唱され洗練されていった。この流れは、ドイツ語圏で隆盛を極めていき、1920年代には

クレッチュマーが『天才の心理学』で注目を集めた。この著者によると、天才の創造性には精神病的気質や体格が関わっているとしており、天才は悲劇的でもあると考えられる。しかし、天才には「積極的な価値感情を、広い範囲の人々の間に永続的に、しかも稀に見るほど強く呼び起こすことのできる人格が備わっており、ダイモニオンという力の働き」（福島 1984、p221）により、人々の畏怖や畏敬を喚起させることができる存在が本質的であると主張した。この様な考えは次第に人々に浸透していき、天才への見識を大きく変えたといったと考えられる。なぜなら、中世までは「天才」という概念が無かったという説もあり、人々の間では、天才は精神異常者や神経病者と見なされることもあったはずである。だが、「近代化によって失われつつある人間の全体性を復元する理想型のイメージとして天才の概念が成立し、病跡学が発達した」（福島 1984、p3）ことで、人類史における天才の位置づけを普遍的にしたのである。

また、ロンブローゾが示したような人物中心の研究から視点を広げた、新しいアプローチも次々と試みられていった。その一例が、フランスの作家ルソーに関する論文が医学的見地から次々と発表された事実である。それは、中谷陽二によると「ルソーの生活史に見出される徴候をさして、精神病質、パラノイア、分裂病といった診断名が賦与されてきた」（中谷 p32）、といった内容のものであった。つまり、作家や芸術家の創作過程で、その創造力に精神病理がどのような影響をもたらしたかを研究しているのである。この方法を用いたのは、「分裂病の病的過程が希有な作品をつくり出す」（中谷 p32）と考えていたドイツ人ヤスパースに代表される。ヤスパースは、画家のゴッホなどは分裂病であったために、優れた作品を残せたという大胆な説を主張して、分裂病に特別な価値を抱かせた。その真意は別としてここで重要なことは、ギリシア時代には哲学や神

学に、ロンブローゾには博物学によって理解されてきた天才性が、精神医学の研究対象となったことである。その結果、より近代的な心理学が天才研究に使用されるようになったのである。

そして、病跡学の新しい分析法に、フロイトが提唱した精神分析法が用いられることとなる。精神分析とは、主に幼児期に抑圧した欲望や無意識の葛藤が神経症の病因になる、と考えることで、分析者がその病因を洞察し治療するという、精神療法である。そのフロイトは『精神分析入門』で、作品の構造の分析を中心とした方法を用いて、レオナルド・ダ・ヴィンチの性衝動の抑圧と自然探求への昇華を述べた。この精神分析的解釈によれば、「夢、失錯行為あるいは神経症の症状が作り出される過程と、作品が創作される過程に共通するメカニズムが存在する」（中谷 p33）とされており、作品内に抑圧されて表現された作家や芸術家の精神面を解析できると考えられている。この理論により、フロイトの精神分析法は、アメリカ人分析家エリクソン、フランス人医学者ドレー、フランス人精神科医ラカンなどに受け継がれていった。そして、今日の病跡学では大きな方法論のうちの一つとなっている。

ここで本章のここまでを整理したい。病跡学とは天才を近代医学の視点から研究する学問として、以上のように変革してきたことを説明した。この学術の分析法として、精神病理学と精神分析の二つの方法が主に用いられており、その対象とされるのは作家や芸術家や政治家などで傑出した人々であることも示した。付け加えれば、日本国内においても、精神医学、心理学、人間科学など広い領域の研究家が、病跡学的見地からの分析を行っている。それらでは宮沢賢治、川端康成、芥川龍之介、夏目漱石などの著名人が研究対象とされている。専門学会の大会や定期機関誌の発行など、学術全体の動きとしても活発であり、研究者は増加の傾向にあるとされている。

海外ではかつてのような盛んな研究が行われていないようだが、日本では戦後から注目され始めた学術であるので、これからさらに研究が進んでいくと予想される。

ではなぜ、2500年前に起源が見られる天才と狂気の問題が、さらに論じ続けられていくのだろうか。それは病跡学の目標が、天才に精神異常の症例を押しつけることではなく、「天才の研究を通して、天才から多くのことを学び取る学問」（福島 1984、p247）であるためである。天才から学ぶことの意義について福島は、

「天才と呼ばれる人々は、平凡な人々が抑圧し疎外しているもの、普通の人々があえて足を踏み入れようとしない人間性の諸領域に敢然と挑戦している存在である。人間性のもつ正気と狂気、精神性と肉体性、意識性と無意識性、理性と非理性などの諸領域の「全体」を生きつくことこそ、天才の特性と考えられる」（福島 1984、p247）

と、天才について解析することで説明している。つまり、人間性のもつ光と影の部分が内在する天才を研究することで、近代に生きる人々が失いつつある個性や創造性を正しく捉えることができるのである。そこに病跡学の存在意義があるのではないだろうか。

ここまでの病跡学の歴史、方法、目的の概要である。次に、前章で紹介した探偵たちを病跡学的視点と方法から考察していきたい。ただし、通常病跡学の研究では、実在した芸術家や作家などが対象になり、小説の登場人物が分析されることは非常に少ない。一方、作品自体を精神分析の視点で分析する場合であっても、その結論は創造した人物の抑圧などが示されることが多い。つまり、物語中の人物は、実在するモデルや作者の理想像などが、作者のイメージを

通して創造されるものなので、架空の人物が研究対象と成り得なかったのではないか。しかし、探偵たちが作者の創造物であったとしても、天才性と狂気を表裏一体で保持している人物であるのならば、病跡学の視点から彼らについて考察できるはずである。このことを踏まえ、探偵たちが持つ狂気的一面から精神病理的部分を検出していく方法で、分析を試みたい。

まず、デュパンとザレスキーの物語には、その鬱屈とした生活面の描写に注目しなければならない。ザレスキーはデュパンをモデルとして創造されたので、不幸な過去や生活が似通うことは当然ではあるが、この二人には共通して、おそらく辛い経験に端を発した抑鬱症と離人神経症の気質を見ることができる。初登場の冒頭から、デュパンは上流階級に生まれたが不幸な出来事から貧しい境遇に陥った、と前置きされた上で「今にも崩れそうな古い怪しげな家」（「モルグ街の殺人」p22）での異様な憂鬱さが記述されている。「この家での私達の生活を他人が知ったら、私達は狂人——多分無害な狂人——と思われただろう。二人は完全に隠遁していた」（「モルグ街の殺人」p22）と同居人が記すように、彼らは書物と煙草だけを道楽とし、暗闇の中で瞑想に耽る。一方、ザレスキーはデュパン以上に閉鎖的な生活をしており、自ら完全に隔離されることを望んでいる。屋敷に閉じこもり、化学実験を繰り返し、麻酔薬や阿片を常用するという退廃的な暮らしである。その様な彼らが癒されるために求めるものは知識的な欲求だけで、その他の邪魔な存在は一切に排除されている。そして、目の前に複雑な謎が用意された時に、彼らの精神は鬱状態を抜け出し軽躁状態に移行するのである。それは、平素は平静で無口なデュパンが、事件解決のために集中力と観察力を総動員し、謎を語るときは異様なほど饒舌になることで明らかにされている。また、ザレスキーの神経症質は次の様に表現されてい

る。

「彼は、たいてい銀色のクッションを敷いた長椅子に仰向けになって、なんとも不思議な仮面のような表情で耳をかたむけながら、飽きる様子がなかった。読むのが少しでもつかえると、イライラしたようにわたしのほうに振り向いて、先を読んでもくれと熱心に頼むのであった。わたしの貯えてきた問題がなくなってしまうと、なぜもっと材料を持ってこなかったとって、本気に怒りだした。……今では新聞を積み上げて——すっかり眠れなくなってしまった。彼は人間の能力の限度を軽蔑する、あまり合理的でない質の男であった。今では彼の飲物であり食物である、適度の麻酔薬でさえ、どうも彼をなだめたり抑えたりするききめがなくなっているらしかった」(「S・S」p160)

この引用部分からでも分かるように、ザレスキーの躁状態は顕著で、この事件の解決時には単独で外出し、自らの生命を顧みないような無謀な行動に出た。この様な彼らの循環気質は、事件の発生から解決にかけて移行する。すなわち、彼らの知識と分析力が推理に活用される間のみ、彼らの精神状態は正常に近い形で活動していると考えることが出来る。

躁鬱症をさらにはっきりと体現しているのはホームズで、精力的に活動する際は正義の探偵であったが、依頼もなく退屈時にあるとひどく鬱状態に陥っていた。また、その様な時にはザレスキーと同様に薬物を常用していた。薬物使用も精神病者の典型的な例である。もっとも当時のイギリスでは、阿片やコカインの中毒性や危険性は認知されておらず、服用が犯罪に当たる物ではなかった。しかしな

がら、同居人のワトスンがモルヒネやコカインを服用するホームズに対し注意を促しても「だが、頭は冴えるのだから副作用などたいしたことはないさ。僕の精神は停滞を嫌うのさ」（『四つのサイン』p5）と返答した。つまり、優れた分析力や想像力により名探偵とされる彼らは、その能力と引き替えに日常では鬱状態に悩まされていた、と考えられる。そこで、「僕は、ぼんやりと生きていくことに耐えられない。精神の高揚が必要なのだ。だからこそ、僕はこの性にあったこの職業を選んだ、いや創り出したと言うべきかな」（『四つのサイン』p5）と、ホームズが自らを分析するように、彼ら探偵がなぜ事件を求めるのか、という問いに答えるならば、知的エクスタシーを求め精神の救済を行うためであると言えるのではないか。また、彼ら3人の精神が性的欲望に全く傾かないことから、知的快感に固執したパラノイア気質を一部見ることもできる。一般的に、パラノイア（固執妄想）気質の人々は、抑圧が強固で、現実感の認識が強く靈感も少ないと言われる。

隅の老人の場合は、素性は謎のままにされ、その生活ぶりが記述されることはない。だが、前章に前述したように、犯罪者の有能さを讃えるような発言の中に反社会的な面を覗かせている。そして、隅の老人の最後の事件では、老人が謎解きをした殺人と強奪の犯人が老人自身であることが仄めかされている。つまり、天才的な名探偵と狡猾な犯罪者という、二面性が彼の正体なのである。その一面とは、犯罪という反社会的行為により、否定的同一性を形成していると考えられる。この否定的、あるいは対抗的同一性とは、福島によると「青年期などに「肯定的な」同一性を獲得することに困難をもった辺境的な人々の選ぶ特異な同一性」（福島 1978、p265）と説明される。安楽椅子探偵として類い希な知力を持つ老人が、どのような青年であったかは明らかにされない。だが、天才性が良い方向

に働くとは限らないことを、これまで病跡学の研究が示してきた。彼はその知力が、犯罪を創造する力へと働き、反社会性として現れた人物なのである。その一方で、老人が探偵役として謎を解き明かす行為には、強い自己顕示欲とナルシズムが現れていると言える。探偵としての力の誇示は、犯罪者としての力の隠匿と相反する作用として老人の中でバランスを保っていたが、ある事件で聞き手である記者に隠した真実を看破され、姿を消す。つまり、そのバランスが崩れてしまえば、老人は存在できなくなるか、破滅に陥るかのどちらかである。

この様な二面性の対立は、ホームズ物語ではホームズとモリアーティ教授、スティーブソンソンの作品ではジーキル博士とハイド氏という形で表現された。しかし、一人の人格中に二面性が内在したという人物は隅の老人が最初ではないだろうか。この老人からおよそ一世紀後に、二面性を持ちつつバランスを保っているという究極の人物としてハンニバル・レクター博士が誕生するのである。その意味では、レクター博士のイメージに最も近い最初の人物とは、この隅の老人であるように感じる。

それでは、レクター博士の天才性と狂気の二面性とはどのようなものなのか。序章で紹介したように、レクター博士はアメリカに渡ってからは精神病理学者の立場を利用して気に入らない患者を殺し、犠牲者の肉を喰らっていた。レクター博士の狂気とは当然、この殺人癖とも言うべき行為である。10代の頃の兵士の殺害は、妹ミーシャの復讐という大義名分があったものの、その後は完全に殺人が癖となり趣味となっていたのである。しかし、レクター博士に躁鬱症、分裂症、パラノイアなどの症例を見ることはできない。この点が最も特異な点で、レクター博士には罪を犯しているという点のみにおいて反社会性人格障害とすることはできるが、殺人に対する



病質な精神状態はどこにも存在していない。もっとも、大切な存在であった妹が殺され食糧にされたという心的外傷が病因となり、殺人と食人衝動を年齢と共に進行させていった、と単純に考えることもできる。だが、その行為に対して精神的に悩み苦しむ様子は、レクター博士には全く現れていない。作品内で、レクター博士が拘留中に暴れて看護師を襲った時も脈拍は85を超えなかった、というエピソードが繰り返されることから、犯行時に神経耗弱などでもなかったことが推測される。つまり、あくまで正常な精神状態のまま凶行に及んでいるのであり、二面性という意味ではレクター博士の表と裏の境界は非常に薄いものであることが分かる。古典的探偵達が自らの病める心のために知的犯罪の分析を欲したように、レクター博士は精神の高揚を必要とし殺人を繰り返すのではないか。あるいは、『羊たちの沈黙』での殺人と逃亡劇がバッハの「ゴルトベルグ変奏曲」をBGMにして行われ、『ハンニバル』でのロナルド・パッツィの殺害方法はバロックの古書に倣ったものであることを考えると、レクター博士にとって殺人は芸術の創造に近いものであるように感じられる。

つまり、治療者と病者の両者の性質を持ちながらも、精神のバランスを失わない点が、レクター博士の特徴なのである。そして、その狂気を反社会的な方向で支えているのが天才的な知性なのである。ここで結論づけたいことは、ホームズなどの時代には知性と狂気は対立の構図にあったが、レクター博士の物語においては積極的に作用し合いながら支え合う存在へと変わった、という点である。

本章では、天才的でありながら神経症質や精神病質を垣間見せる探偵達の精神面を明らかにするために、天才の精神面を研究している学術である病跡学の観点から考察した。尚、分裂病は現在では統合失調症と病名を変更しているが、本論文では当時の文献のまま記

した。内容としては、病跡学の歴史を紹介し、その応用例として探偵達に対し精神病理学的な分析を試みた。そして、天才的知性の故に精神面での問題を抱える探偵達は、謎の解明によって精神病質を脱することができたが、レクター博士は全く逆の猟奇犯罪という方向に向かった、ということ本章の結論としたい。何故、このような逆転が生じたのか。この点を考察するために次章では、作品全体とレクター博士の多角的分析を行いたい。そして本論文の結論部として、レクター博士の存在についてまとめていきたい。

#### 4章 世界の中心にいるけもの：レクター博士の精神分析

前章では、レクター博士とその他の探偵達の精神面の分析を行うため、病跡学の観点から考察した。本章では本論文の結論部として、作品全般におけるレクター博士を各章の議論の発展を含めて考察することを目的としたい。始めに、前章の両面性という問題の意義について、より概念的な考察を行う。その後は、病跡学のもう一つの分析法である精神分析の観点から探偵物語を見直し、レクター博士の分析を試みる。

本章では、レクター博士のかなり詳細な研究書であるリチャード・マクドナルドの『ハンニバル・レクター博士の記憶の宮殿』を参考に考察していくこととする。この著書は『ハンニバル・ライジング』の発表以前に著されたもので、レクター博士の生い立ちの部分では全くの見当違いを披露しているが、大脳生理学や芸術面や美食面など広い領域で分析している。この著書の冒頭で、『悪霊』のスタヴローギンを引き合いに出した後で、「混沌たる時代に、冷酷かつ理知的な食人鬼としてあらわれたレクター博士。彼もまた、時代を象徴する人物像として、私達の不透明な新世紀を暗示している」(マ

クドナルド p2) と述べる。スタヴローギンは無神論と革命が入り交じる混沌のロシアを象徴する人物として描かれたが、レクター博士もまた我々の時代を象徴する人物として誕生したとは言えないだろうか。その論拠は「反社会的病質者である自分を相対化しうる、軽々とした彼の教養と知性の深みと趣味の深さ」(マクドナルド p3) を持つことが、細分化された現代文化の象徴と考えることができるためである。それでは、レクター博士と象徴性とを関連づけて考察するため、本章ではより概念的な分析から始めたい。

前章では病跡学的分析から、レクター博士を患者と治療者という立場に定め、狂気と知性とが反発し合うのではなく、互いに助長し合い反社会性気質を形成したと考察した。そこで、前章の発展としてレクター博士の両極性が、神と悪魔の対立に見て取れるという議論を展開したい。シリーズを通して殺人を繰り返す悪役としての一面は確かに悪魔的で、心理学的考察の天才として探偵役をこなす一面は不可知を知る神のようである。この二面性を、野崎はサイコミステリーの物語で在るが故に生まれたものだと分析する。

「深淵を覗き込む探偵役はしばしば、こうした恐怖を分担させられる。犯人に最も近く、かれを深く理解できるのは探偵をおいてないからだ。探偵と犯人とが同根人物であるのはドストエフスキー以来のミステリー本来の原則だろう。探偵が深淵に身を投げてしまう例は数少ないにしてもミステリーの歴史には見つけられる。しかしサイコ小説におけるほど、探偵と犯人の役割分担が危機的に追い詰められる例は他には見あたらないのだ」(野崎 1997、p145)

つまり、序章で紹介したようなサイコキラーを捕らえる役となっ

たレクター博士は、必然的に彼らと同種で彼ら以上の怪物として創造されたのである。付け加えれば、この引用文中にある「深淵」とは、哲学者ニーチェの有名な言葉である「怪物と戦うものは自らが怪物とならないように気をつけなければならない。深淵を覗き込むとき、深淵もまたこちらを覗き込んでいるのだ」(レスラー p1)、の中に起源がある。すなわち、サイコキラーという怪物を生み出し続けるアメリカにとって、怪物と探偵の同一化は非常に危惧すべき問題であり、この格言は深い意味を持つことになる。さらに野崎を引用すると、

「レクターはシリアルキラーの時代によってつくられた昇華されたイメージだ。そう指摘するだけでは充分ではない。レクターは作者のあらゆる取材、異常殺人者へのアプローチ、そしてこうした殺人の捜査を専門化せしむる客観条件、そして殺人犯はある異次元にはまりこんだ存在であるという人間観、時代の生んだ病的な妄想、それらすべてのものから合成されてできあがった怪物である。そうして、かれが似ているものがあるとすれば、それは神だ」(野崎 1997、p130)

とレクター博士を評する。事実、レクター博士は推理小説における探偵役として神の視点に近いものが与えられている。だが、一方でレクター博士は神に成り代わる、あるいは神に対抗する存在としても君臨する。それは、神というよりは、神に対する信仰心を嘲笑するかのような発言から考えられる。例えばクラリスに対し、「最近、シチリアで起きた事件を知っているかね？ すばらしいことだ。——教会の天井が65人の祖母たちの上に崩落したのだ——天に神がいるとしたら、そういうことが好きなのだ」(『羊たちの沈黙』 p21)

と淡々と語り、神の存在を肯定するならば、神は残酷を好むという考えを示した。レクター博士は、妹が殺されたことを含めた神の悪魔的所業を見聞することで、悪魔と神の存在は分かち難いと認めていることが考えられる。ここで示されることは、レクター博士の物語中の存在とレクター博士の思想が同調していることである。つまり、物語中における神に近い存在が悪魔的殺人を行うということと、現実の神が悪魔的意志により悲劇を起こすということが合致しているのである。この合致により、探偵役という神であるレクター博士の存在は、神と分かち難い悪魔としても成り立つことが分かる。この思想は善悪の概念を絶対的でなくし、道徳の判断が複雑化される可能性を十分に含んでいる。しかし、この思想自体は現代社会が生み出したとは言えず、それに近い思想が19世紀末のデカダンスである。これもマクドナルドによれば、「世紀末においては極めて革新的で、悪魔的な病質であったので、ニーチェの虚無思想の中にハンニバル・レクターの行動様式を見るのはさほど難しいことではない」（マクドナルド p49）と解説されている。さらに、レクター博士の行動には、現状の社会を痛烈に批判する性質があるとマクドナルドは主張する。

「レクターが悪魔であることは明白なのである。同時にもはや悪魔という概念が、犯罪や社会的な悪といった諸行の判別、規準によるものではないことも明白である。……彼はアメリカ社会と官僚システムを批判するにとどまらない。いわば既存の価値観への批判を内包している。秩序づけられたあらゆる規範、とくに正義を装った社会システムを批判するがゆえに、しばしば正義そのものを破壊する」（マクドナルド p50）

ここまでを結論づけると、レクター博士の狂気の裏側にあるものは、アメリカの国としての病理への批判を、神の冒涇という究極な形で表現したものなのではないか。レクター博士の二面性、そして両極性を突き詰めれば、知性と狂気、善と悪、神と悪魔というような対立するはずであるのに表裏一体の存在が見えてくるのである。

ここからは、精神分析の観点からレクター博士を考察していくこととする。まず、なぜレクター博士が天才で狂人とされたか再び確認したい。本論文の2章において、レクター博士が安楽椅子探偵の系譜の上に存在しており、現代風に表現すれば特別捜査アドバイザーとして物語を支配していることを説明した。そして、その系譜の上にある人物は例外なく、体力や腕力に頼らず、天才的推理力と言える高い分析能力によって事件を解決させてきたことを示した。そして3章では、その天才性がその人物に精神病質を引き起こすことを例証した。異常な知性と異常な精神状態は、常人からしたら表裏一体と見なされるために、二面性として一人の人物に内在してしまう、と結論づけた。つまり、前章までに示したことから次のような主張が可能になると考える。すなわち、安楽椅子探偵として登場する人物は、天才にして狂人であることを宿命づけられている。そのため、レクター博士には天才性と異常性の性質が存在するのである。要約すれば、レクター博士が安楽椅子探偵として存在することそれ自体が、レクター博士が天才であり狂人でもある理由となる。そこで次に、精神分析の分析法をもって探偵物語をみていきたい。

探偵役の人物が狂気を共存させてしまうのは、内なる葛藤の他に、常に他人の狂気を見つめていることが病因となるのではないだろうか。それは、精神分析の観点からすれば、探偵の役目は犯人が隠蔽している事実を暴き、新しい事実とすり替えることにある、という探偵物語の構造に理由があるように考えられる。この構造を説明す

るために、精神分析学者ジャック・ラカンは、ポーの『盗まれた手紙』を分析し、探偵デュパンを、精神分析的治療法を施す精神科医の役割と同次元で解説した。そのために、物語中の手紙の役割はシニフィアン（意味するもの）であるとした。物語中では、自らが隠しているものが外からは見えないと思いこんでいる王妃と大臣は、見えるところに晒すという隠し方を同じように取る。だが、放置されていることを知っている、分析的知性を持つ人物、一度目は大臣で二度目はデュパンによって別な手紙とすり替えられてしまう。この手紙は保持している人物を主体的に支配するが、デュパンだけは、手紙の効果である無意識からの支配から免れ5000ポンドの礼金と引き替えることができる。つまり、同様な展開が繰り返されるこの構造は、精神分析的治療時における転移の様子が現れたものであるとラカンは考えた。これは患者の症候や葛藤が、新しい正常なものへと転移する治療過程であり、治療者の役目は新しい症候と古いものをすり替えることである。それを可能にするのは、精神分析的知性を持つ治療者、すなわち分析者としての能力である。この分析力というのは、人間が隠していることを、いかに見破るかという能力で、症候とは、患者が隠したいと思う欲望、あるいは患者自身が気づいていない徴候である。このようにラカンはポーの探偵物語を、精神分析による治療の物語に置き換えたのである。つまり、探偵物語における探偵役とは、治療を施す分析者であり、その方法は犯人が犯行や事実を隠すことによって徴候化するトラウマを、すり替えることで行われるのである。そして何より重要な点は、すり替えた犯人のトラウマを、すかさず別な何かと再びすり替えることによって、自分自身にその症候が残ることを防ぐのである。具体的に言えば、事件解決と共に礼金を受け取ることで、探偵に転移した症候を解消することになる。要するに、ラカンは解析した探偵物語の構造

から考えると、探偵役の人物は事件に直面する度に、患者となる犯人から症候をもらい受けているのと言えるのである。すなわち、探偵自身も常に病質なものと向き合わなければならず、もしすり替えに失敗すれば、今度は悪性転移として自分にその徴候が生じてしまう危険性があり、探偵役の人物が冷静沈着で達観した姿勢を取るのも、こうした危険を常に意識しているからではないだろうか。

探偵物語にこのような構造が認められるならば、なぜレクター博士が探偵役としての機能以外の部分では殺人犯として、すなわち患者として存在するのだろうか。それは、すり替えの不成功による悪性転移が理由であると言える。少なくとも、まだ青年であった頃の『ハンニバル・ライジング』におけるレクター博士には悪性転移の徴候を見ることができる。『ハンニバル・ライジング』はレクター青年が、実妹ミーシャを殺し食糧にした兵士達を探し出し復讐を行うことが物語の主軸である。殺害した元兵士達を患者と考えると、この物語ですり替えられる新しいシニフィアンは、ミーシャ殺害の記憶である。レクター青年が元兵士の一人ドートリッヒを追い詰めると、「あの子はどのみち死ぬ子だった」（『ハンニバル・ライジング』Ch9、59分）と、ミーシャが肺炎を患っていたという嘘の事実で自己を正当化していることが示される。他の元兵士達も同様に、レクター青年の詰問に対しては「生きるためだった。グルータスが手早く殺したから苦しんではいけない」（『ハンニバル・ライジング』Ch11、1時間19分36秒）と責任を転嫁させている。なぜなら、人間は自らの精神を守るために、記憶を他人へ話す際には作り変えられた記憶を話す。元兵士たちが語る記憶は、それらが事実であることは問題にされない、言わば物語としての記憶である。それを精神分析ではトラウマと呼ぶのだが、レクター青年はそれらが嘘であることを見抜き、そこで人間を殺し食したという事実とすり替える



のである。最終的にはレクター青年に殺害されるのだが、その過程では抑圧されていた真実の記憶を戻させるのである。

しかし、主犯であったグルータスは逆に別な事実をレクター青年に真実として告げる。グルータスが「お前も妹を食べた」と告げる場面（『ハンニバル・ライジング』Ch15、1時間46-47分）が、まさに悪性転移が生じた場面である。なぜなら、レクター博士にとって、このグルータスが話す事実が、真実を少しでも含んでいるとしたら、耐えられない事実であることは間違いない。悪性転移は、事実を受け入れられない患者から分析者への攻撃的感情とも考えられており、このグルータスの言葉は、苦し紛れの言い逃れと考えるのが自然である。だが、その可能性を少しでも疑ってしまった瞬間に、レクター青年は患者として徴候化してしまう。この直後グルータスを殺害するが、映画を通して極めて冷淡に殺害を行ってきたレクター青年が、この殺人だけは怒りに任せたものになったことから、この転移が悪性に働いたことが分かるのではないか。つまり、このトラウマをすり替えられず抱え込んでしまったこの瞬間に、レクター博士の殺人鬼としての一面が完全に覚醒したと考えられる。そして、アメリカに渡り快楽的な殺人を繰り返す人物へと成長してしまったのではないだろうか。

それでは、その後のレクター博士にはどのようなことが言えるのだろうか。『羊たちの沈黙』では、正常な分析者のように、クラリスの持つ病理を治療してみせる。2回の対話によって（『羊たちの沈黙』Ch13、54-56分 Ch17、1時間9-13分）クラリスの精神病質をすぐに見抜き、どうすれば治療できるかをレクター博士は考えた。そしてそれは、警官の父の殉職によって生じたクラリスの心的外傷を、事件解決をクラリスに行わせることによって、最悪の記憶を活躍の記憶にすり替えるという正当な治療の過程を経て行われた。ク

ラリスに対しては、見事な良性転移による治療を成功させたのである。しかし、なぜレクター博士はクラリスの精神分析的治療を行ったのだろうか。言い換えれば、レクター博士はクラリスから何を得ようとしたのであろうか。

『羊たちの沈黙』における本筋の連続殺人事件の解決報酬として、レクター博士は自由の身を手に入れたと言えるが、クラリスを治療したことに対して得られる効果は明示されていない。つまり、レクター博士はクラリスからすり替えたトラウマを抱えたままなのである。よって、その効果は次の『ハンニバル』に示されたとは考えられないだろうか。『ハンニバル』においてレクター博士がクラリスから得ようとするものは、母性による安心感や充足感、一言で言えば愛情である。さらに言えば、亡きミーシャの面影をクラリスに感じ取り、新しいミーシャとしてクラリスを欲したと考えることもできる。そう考えられる点は映画を通して現れており、クラリスには決して危害を加えず、手紙や靴や食事を贈っている。そして、クラリスはその性的な感情を、原作では受け入れレクター博士と歩いていくことになるが、映画『ハンニバル』では拒絶する。拒絶の結果は映画の最終章で、レクター博士が自らの手首を切り落とす場面（『ハンニバル』Ch30、2時間3分52秒）に象徴される。このことはレクター博士が、クラリスの拒絶を受けて自らを去勢し、性的な欲望を完全に封印したと考えられるのである。また、クラリスが拒絶した理由は、「君は秩序の維持に身を奉じる。君はFBI職員としての宣誓を守り、羊を守ることが職務だと思っている。……完全な善悪の観念を持っている」（『ハンニバル』Ch24、1時間34-38分）とレクター博士が言うように、クラリスが愛するのは夜警警官として秩序を守った父親像なのである。そのため、レクター博士を拒絶し捕らえることで、FBIという自分の信じる秩序に戻ろうとする

のである。さらに、この時点ではクラリスの症候は解消されており、治療者としてのレクター博士を必要としなかったことも理由に加えられる。

以上のように『ハンニバル』シリーズを精神分析的観点から考察を試みた。その結果、レクター博士は、すり替えによる悪性転移によって快楽殺人という症候を徴候化させた、トラウマを抱え込んだ狂人の分析者となる。その一方でクラリスを治療者として癒し、その愛情を得ようとしたことが判明した。それでは結局、レクター博士という存在は、分析治療の失敗に全てが説明される人物なのだろうか。前述したように、レクター博士は神の姿をした悪魔であるとするならば、その様な超越的な存在がいくつかの症候を退蔵していることには何か意義があるのではないか。ここからは筆者の想像によるものであるが、レクター博士はトラウマを抱え込むことをむしろ歓迎し、受け入れているのではないか。様々な人物の症候をすり替え、殺害し、その病質なものを自らに吸収しているのではないか。言い換えれば、悪性転移を故意に引き起こし、相手の症候を食らっているのではないか。というのも、クラリスに精神分析による治療を行ったレクター博士が、転移についての知識が欠落しているとは考えられず、症候が自分に移り変わることを承知の上であえて、治療の失敗というべき悪性転移を引き起こしていると言える。

そう考えるのは、『ハンニバル』シリーズでは、患者というべき犯人は全て、レクター博士が直接、あるいは間接的に関与して殺害しているからである。そして、その犯人達を部分的にレクター博士の中に活かした形で、次の物語に登場するのである。レクター博士は『ハンニバル・ライジング』ではグルータス達を殺害し、食人嗜好という病質を見出した。『レッド・ドラゴン』では、肉体と精神を神に近づけようとするダラハイドをグレアムに殺害させ、次の

『羊たちの沈黙』ではまさに神のように君臨した。その『羊たちの沈黙』では変身願望のあるガムがクラリスに射殺され、『ハンニバル』の登場時には、フィレンツェでフィル博士という司書に変身を遂げていた。この一連の流れから、象徴的にはあっても、犯人達が望む姿にレクター博士がなってみせていると考えることができる。そして、現実世界に照らし合わせても、社会的病質者だけがこれらの願望を抱くわけではなく、正常な生活者であっても精神の内には様々な欲望を抱えているのである。究極的には異常な食人嗜好となる暴力的性欲、自らを神格化する感情、男装や女装などに現れる変身願望などは、小さく許容できる範囲であれば一般的な人々にも認められだろう。それはつまり、我々の社会的に抑圧されている欲望をレクター博士が体現しているのである。要するに、レクター博士は我々の無意識下を鏡のように映し出していると言える。それを可能にするのは、様々な症候を抱えても崩壊しない、レクター博士の強靱で高貴な精神と知性である。そして、そのレクター博士の圧倒的な狂気が、我々の欲望の結晶である以上、まさに神であり悪魔でもある存在として、これから先も最も偉大な悪役として君臨し続けるのではないだろうか。

## 終章 羊たちのなく頃に

前章では、レクター博士について概念的な考察と、精神分析的な考察を行った。そして、レクター博士が神と悪魔の両方に近い存在であるという観点と、精神分析治療における悪性転移の発生を示した。最後に、それらを踏まえた上で、独自の仮説を考察した。ここからは、本論文全体を要約し、反省点、課題点を示すこととする。

本論文では、天才性と狂気の関わりについて考察するため、『ハ

『ハンニバル』シリーズにおけるレクター博士について4章にわたり、探偵小説論と病跡学的観点から分析をした。2章ではレクター博士が安楽椅子探偵として認められることを示し、プロファイリングによる推理が特徴であることを記した。3章では病跡学観点からレクター博士とその他の探偵役を分析し、天才的知性は精神病質を併合しやすいことを示した。そして4章では、前章までの結論として、安楽椅子探偵としての役割を持つ人物は天才性と狂気が内在していることを主張し、レクター博士がなぜあのような人物であるのかを確認した。そして次に、精神分析の観点からの考察と観念的な解釈を加えて、レクター博士の存在について分析した。その分析によるとレクター博士は、精神分析の解釈では、治療者とトラウマを抱え込んだ狂人という両極な面をみせており、その二面性を観念的には、神と悪魔が表裏一体の存在であることを主張するために創られたものであるとした。

以上の様に展開してきた本論文だが、アプローチ方法の紹介が大半となり、それぞれの議論が突き詰められているとは言えず、議論対象に対して多角的になり過ぎた点を反省したい。具体的に言えば、レクター博士の存在意義と、探偵役としての目的について、などの問題は議論が広がってしまったように感じている。ここで、より明瞭な主張が出来れば議論が集中した論文となったと考える。

その一方で3章では、先行研究のない試みを行った。小説内の登場人物に対して病跡学的観点からの考察を試みた点は評価に値すると考えている。

今後の課題点として、1つの対象に対して一貫した分析法を用いて、一定の学術的観点から考察を行うこと、そして、明瞭な主張に基づき議論を展開することが重要となるだろう。

## 参考文献一覧

## 図書資料

- 石田一『凶説モンスター・空想上の怪物たち』河出書房、2001.
- 内田樹『映画の構造分析』晶文社、2003.
- 江戸川乱歩『探偵小説四十年』講談社、1979.
- オルツィ・P.『隅の老人』早川書房、1976.
- 加納一郎『推理・SF映画史』すばる書房、1978.
- グールド・S・J.『ダーウィン以来』ハヤカワ書房、1997
- 小林喜美子「訳者あとがき」テイ・J『時の娘』早川書房、1980、pp285-287
- 小林司、東山あかね『シャーロック・ホームズ』河出書房新社、1997.
- ダルモン・P.『医者と殺人者』新評論、1992.
- ドイル・C.『四つのサイン』河出書房新社、1987.
- ドイル・C.『緋色の研究』河出書房新社、1987.
- 津本一郎『天才と狂気——学としての病跡学のために』金剛出版、1982.
- 野崎六助『異常心理小説大全』早川書房、1997.
- 『ハンニバル・レクターのすべて』新潮社科学行動課編、新潮社、2001.
- ハリス・T.『ハンニバル』(上)(下)新潮社、2000.
- 『ハンニバル・ライジング』(上)(下)新潮社、2007.
- 『羊たちの沈黙』新潮社、1988.
- 『レッド・ドラゴン』(上)(下)新潮社、1981.
- 福島章『殺人という病』金剛出版、2003.
- 『統天才の精神分析』講談社、1984.
- 『天才の精神分析』講談社、1978.
- 福島章、中谷陽二編『パトグラフィーへの招待』金剛出版、2000.
- ポー・A.ほか『名探偵登場1』早川書房、1956.
- シール・P.「S・S」
- ポー・A.「モルグ街の殺人」
- 著者不明「あとがき」pp286-294
- マクドナルド・R.『ハンニバル・レクター博士の記憶の宮殿』夏日書房、2001.

- 別府恵子、溝口薫ほか『探偵小説と多元文化社会』英宝社、1999.  
ラドフォード・J.『シャーロック・ホームズ 事件と心理の謎』講談社、  
2001.  
ヤッフエ・J.『ママは何でも知っている』早川書房、1977.  
レスラー・K・R.、シャットマン・T.『FBI 心理分析官』早川書房、  
2000.

### インターネット資料

- 探偵の口笛 ― 海外ミステリーのクラシック：作成者不明  
<http://gengetu2005.blogzine.jp/tanteinokutibue/>(2007/10/22)  
ハンニバル・レクター資料室：作成者 NAO  
<http://www.hannibal.my-sapporo.com/> (2007/10/22)  
隅の老人のミステリー読書雑感：作成者不明  
[http://pub.ne.jp/suminoroujin/?cat\\_id=56933](http://pub.ne.jp/suminoroujin/?cat_id=56933)(2007/10/22)  
初心者のためのミステリ用語辞典：作成者不明  
<http://mysdic.zero-yen.com/> (2007/10/28)  
大好きな映画の部屋：作成者 佐々木聡  
<http://www1.harenet.ne.jp/~sato2000/top/top.html> (2007/11/08)  
goo 映画：作成者 goo  
<http://movie.goo.ne.jp/movies/PMVWKP7527/comment.html>  
(2007/11/08)

### 映像資料

- 『コピーキャット』ジョン・アミエル監督 シガニー・ウィーバー主演  
アメリカ 1995  
『セブン』デビット・フィンチャー監督 モーガン・フリーマン主演 ア  
メリカ 1996  
『ゾディアック』デビット・フィンチャー監督 ジェイク・ギレンホール  
主演 アメリカ 2007  
『ハンニバル』リドリー・スコット監督 アンソニー・ホプキンス主演  
アメリカ 2001  
『ハンニバル・ライジング』ピーター・ウエーバー監督 ギャスパー・ウ

リエル主演 アメリカ 2007

『羊たちの沈黙』ジョナサン・デミ監督 ジョディ・フォスター主演  
アメリカ 1990

『レッド・ドラゴン』ブレット・ラトナー監督 エドワード・ノートン主  
演 アメリカ 2003